

陳舜臣さんを語る会通信

NO.131

Dec. 2024

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2024年12月10日
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

作家・陳舜臣にとっての祖国とは ー 生誕100年にあってー

1. 神戸大水害を目のあたりに黄河を連想、「まだ見ぬあこがれの祖国の山河」

【1938年、神戸大水害を目のあたりにして】

陳舜臣さんは『青雲の軸』で、1938年7月の神戸大水害を目のあたりにした主人公俊仁、及びその心の動きを次のように描いています。

俊仁はあたりを見まわした。彼はこのとき、目の前の濁流から、ふと黄河や揚子江を連想した。（こんな色だろうか？）まだ見ぬあこがれの祖国の山河。

【1972年、初めての中国訪問】

陳舜臣さんは、1972年10月、日本赤十字社が発行する証明書による「探親」という形で初めて中国を訪問します。陳さんにとっての「探親」とは、1953年、祖国建設の情熱に燃えて中国に渡り、当時、北京放送勤務だった妹の妙玲さんに会うことでした。この時のことを記した朝日新聞（1972.11.16、17）の記事を見てみましょう。

さて、このたびの旅行だが、北京の故宮、八達嶺の長城、西安郊外の華清池など、みな写真でなじみの風景だし、そこを舞台に活躍した史上の人物とも、浅からぬつき合いがあると、自分ではおもっている。だから、そのような場所に、私は完全に予想外のものはな一つ発見しなかったといえる。はじめて見

る土地なのに、「再会」というかんじのほうがつよかった。感慨がなかったのではない。いたるところで、私は深い感動を受けたが、それは久しく別れていたものに再びまみえるよろこび、と表現すべき性質のものだった。長沙から北京へむかう機上から、私は長江、洞庭湖、そして黄河をみた。夕陽をうけて、まるで砕かれたガラスの破片が黄金色にきらめいて散乱したようにみえるのは、おそらく用水池の群れであろう。数千メートルの高度から、人間の営みを見おろす。この土地では太古から、わが祖先が生きる営みにいそしんできたとおもうと、胸が詰まりそうになる。まるでセンチメンタル・ジャーニーであった。

2. 陳さんは三蔵法師と祖先が同じ ルーツは中原、潁川（えいせん）のほとり

1. 陳舜臣さんの原籍は台湾の台北です。日本へ来るまでの陳家は、台北郊外の新莊鎮付近で農業を営んでいたが、中国の古典に親しむ主をもつ家系でもありました。

2. 我が家は全部日本に居を移していて、台湾にいるのは父の従兄弟が最も近い親戚である。その親戚の住んでいるのは、台北に近い新莊というまちのはずれだった。今はもう台北と新莊はくっついてしまったが、そのころは田園風景でへだてられていた。（『道半ば』）

3. 小学三年の春休みの帰省は祖父の法事のためだった。…。長い「のりと」のようなものが読みあげられる。…。最後にのりと（？）を捧げられる人、つまり祖父の住所氏名が読みあげられる。これはわかった。住所は台湾ではなく、そこへ移住する前のものである。——泉州府同安県…。この泉州府が出てくれば、もうすこしで終わるとわかってほっとしたものだ。（『道半ば』）

4. 『陳舜臣中国ライブラリー②⑤』「天竺への道」の一部分、三蔵法師玄奘に絡め、陳舜臣さんが陳家のルーツにふれた箇所を要約すると次のように

なります。

玄奘の俗姓は陳と言い、現在の河南省開封市に近い潁川の人で、後漢の陳寔の子孫であるとし、続いて陳家のルーツについて次のように語ります。

じつは私の家も、陳寔を祖とすると称している。…。子供のころ、私はよく父や祖父から、ご先祖陳寔の話をきいた。ご先祖といっても、千七、八百年も前のことときくと、まるで別世界の話のような気がした。

5. 1932年、祖父恭和死去。右はその後

に作られた陳家の墓。「潁川」の文字がはっきりわかります。恭和「三十一世祖」という文字を墓碑裏面に確認。従って、陳舜臣さんは、三十三世ということになります。



追谷墓地にある陳家のお墓

作家・陳舜臣にとっての祖国とは — 生誕100年にあたって —

3. 陳舜臣さんの 国籍変更

1. 1945年、終戦（日本の敗戦）日本国籍から中華民国籍へ

あのとき、日本は連合軍の占領下におかれたでしょう。中華民国の代表団が来日しましてね。その代表団のところに私たちは国籍変更にもなう登録をするんです。そして中華民国の証明書みたいなものをもらったんですよ。（『陳舜臣中国ライブラリー⑨』「自作の周辺」）

2. 進路変更

否応なく国籍を変更されたので、これまで自分に予定されていたコースが取りにくくなったのである。大阪外語は国立だから、そこの教授、助教授は国家公務員という一面がある。「任官」しなければならないのだ。（『道半ば』）

3. 1970年、中華民国のパスポート取得

私が最初にパスポートを取ったのは中華民国のです。アメリカ、カナダを旅行したとき、まだ両国とも中華人民共和国を承認していませんでしたからね。ところが、最初のうちは、中華民国の領事館がなかなか出さなかったんですよ、私にパスポートを…。それは、私の親父が大陸と貿易をしているからだったんです。（『陳舜臣中国ライブラリー⑨』「自作の周辺」）

4. 1972年10月、初めての中国訪問

陳舜臣さんは、日中の国交が回復すると、日本赤十字社が発行する証明書による探親訪問という形で、お母さん、弟・介臣さんらと、当時、北京放送勤務だった妙玲さんを訪ねます。妙玲さんは53年、「祖国建設の情熱に燃え」とはいえ、まだ、二十歳になったばかりの若さで家族と離れ、第一回華僑帰国船興安丸で大陸に渡りました。（右の写真）

5. 1973年、中華人民共和国籍取得

8～9月 蘭州、酒泉、ウルムチ、トルファンなど憧れの土地を初めて歩く。この旅を機に、中華人民共和国籍取得。

6. 1990年10月、日本国籍取得 — 1989年の天安門事件をきっかけに —

おそらくあれ（天安門事件）がなければ、そのまま人民共和国の国籍でいったかもしれないですね。ちょっと失望したんですよ。あのとき、私は新聞なんかで中国政府を批難する、かなりきつい文章を出しました。今後、入国拒否されるんじゃないかと、自分でも思ったほどです。（『陳舜臣中国ライブラリー⑨』「自作の周辺」）（『陳舜臣さんを語る会通信』No. 109）

7. 1990年12月、台湾旅行。この時、李登輝総統訪問

（1949年10月、日本に帰って以来）私は四十年のあいだ台湾に帰ることはなかった。台湾では白色テロのすさまじい時代で、何既明氏（かきめい）はときどき来日したが、私の帰郷には賛成しなかった。まだ危ないというのである…。私はその後作家となり、中国大陆へしばしば旅行し、また父の店も中国貿易をおこなっていたので、台湾へのビザははじめから出るはずはなかった。

台湾で蔣経国総統が戒厳令を解除（1987年）し、その翌年、蔣経国氏死去によって李登輝氏が総統となった。こんなふうに環境がととのい、1990年に私はやっと台湾の土を四十年ぶりに踏むことができた…。私の帰郷にあたっては、何既明氏が舞台裏でいろいろと世話してくれたが、それには李登輝氏の支持があったのはいうまでもない。（『道半ば』）

8. これからの中心は国家じゃない — 世界市民主義 —
（『中国傑物伝』『耶律楚材』『桃源郷』）

—日本人として育ったんだけど、ほんとうは中国人だったとか、中国人として育ったけれど、実は日本人だったとか。陳さんの作品には、ある意味で複雑な境遇の人物がたくさん出てくるんですね…。そういう問題は、この地球上ではかなり普遍的な問題だと思うんですよ。

陳 そうですね。これからの中心は、国家じゃないという気持ちはあります。

—なにになに人とか、国籍なんていうことは、あまり考えないほうがいいんですね。

陳 ええ、そういう時代になったんですよ。
（『陳舜臣中国ライブラリー⑨』「自作の周辺」ほか）



妙玲さん（陳來幸氏提供）



作家・陳舜臣にとっての祖国とは ー 生誕100年にあたって ー

4. 陳舜臣さんはチャンドラ・ボースに負い目!? 『虹の舞台』

「国籍を変える」 大変だが便宜的なことも

—— 国籍を変えたいというのは、心情としても大変なことじゃないですか。

陳 それはそうです。しかし一方で、便宜的なこともあり得ますしね。…昔は、国籍を変えるときに批難するやつが、たくさんおったんですよ。あいつは祖国を売ったとかね。

（『陳舜臣中国ライブラリー⑨』『自作の周辺』）

『虹の舞台』プロローグ

神戸三宮に作られる「世界の味センター」にインド料理の店を決めた宝石商マニラル・ライが殺された。彼にはインド独立の闘士チャンドラ・ボースから運動資金の宝石を奪ったとの噂があった。素人探偵陶展文の活躍は…。

■チャンドラ・ボースの最期 彼は太平洋戦争中、日本軍に協力してイギリスと戦おうとした。しかし、日本軍とともに敗れ、ソ連亡命を図る。途上、台北で、45年8月18日、彼の乗った日本陸軍機が離陸に失敗、その時の傷がもとで死亡した。

陳さんは、チャンドラ・ボースに負い目！？

陶展文は目をとじた。かつてしいたげられた国の人間として生れた彼は、独立のために戦ったボースの姿に感動したのである。

慚愧の念もあった。ボースは戦ったのに、自分はいから逃げたのではないか？陶展文が目をはひらくと、大泉邸の椿の花が（紅い花もあれば、白い花もあるのよ）と、囁きかけるような気がした。



ボースの墓
(杉並区 蓮光寺)

5. 陳舜臣さんの、台湾を舞台にした小説は極端に少ない

陳舜臣さんの小説で、台湾を舞台にした長編というと、『怒りの菩薩』（『陳舜臣さんを語る会通信』No.3）しか思い浮かびません。短編では、『胡蝶の陣』『シンカンの若者』、『三本松伝説』『祖師廟にて』、『紅蓮亭の狂女』『鉛色の顔』、『望洋の碑』『望洋の碑』と、『推理ストーリー』『潜伏者』の五作あります。私が読んでいないだけで、もっとあるかも知れませんが、膨大な陳舜臣作品群からすると、極端に少ないです。

『怒りの菩薩』プロローグ■終戦直後、日本の植民地支配から解放されたばかりの台北の町で一つの殺人事件が起こります。

それから半年後、いよいよ主人公の登場です。1946年春、主人公楊輝銘が、日本から、新妻林彩琴を伴って台湾へ帰って来ます。楊輝銘と林彩琴が彩琴の実家を訪れると、その前夜、第二の殺人事件が起こっていました。

そして、この、実家訪問中に、大陸へ行き既に亡くなったと思われていた林家の長男林景維が戻ってきます。

ところが、あるうことか、林景維は翌日、近くの菩薩山で死体となって発見されます。三つ目の殺人事件です。菩薩山では、警備司令部将校の指揮の下、地元警官、村の若い衆、送還待機中の旧日本軍の部隊まで動員されて山狩りが行われます。

あと、林景維殺人事件の背景と犯人捜しを中心にストーリーは展開します。

こんな「詰問状」がトラウマになっているのでしょうか？



集英社文庫の表紙

（『怒りの菩薩』は）故郷の台湾を舞台にした。菩薩村は実在の観音村がモデルである。観音村出身の留学生から『拝啓陳舜臣殿』という七十枚の詰問状を受取った。作者の政治意識を弾劾したものである。つらい。エンターテインメントの作品には台湾を使うまい、と、心に誓った。（『自作を語る』『宝石』昭和38年9月号）

ところで、「作者の政治意識」とはなにを言うのでしょうか？当時は、

一九四七年二・二八事件

一九四九年 戒嚴令施行。蒋介石、国共内戦で敗北、首都南京を脱出、重慶、成都などを経て、12月、息子の経国とともに台湾着

のような時代でした…。

■垂水千恵氏は論文「台商作家が描く台湾表象―陳舜臣・東山彰良を中心に―」において、「中国」歴史小説家として大成していく軌跡の中にも、台湾は常に陳舜臣の「根」として存在していたとし、その例として、『残系の曲』をあげ、台湾独立運動にまつわる記述に言及しています。

作家・陳舜臣にとっての祖国とは ー 生誕100年にあたって ー

6. 陳舜臣さんの人生に影響を与えた三つのこと ほか

陳舜臣さんの人生に影響を与えた三つのこと

一つ目。

陳舜臣さんは昭和19年、二十歳のとき東京へ行った。このときの東京行きで、忘れ難いことがあった。

神田の古本屋で、『斯诺・西行漫記』という中国語の本を買ったことである。じつはその『西行漫記』こそ、『中国の赤い星』(Red Star over China)の中国語訳だったのである。『西行漫記』を読んだとき、私は二十にすぎなかったが、興奮をおさえることができなかった。幾晩も睡れなかったことをおぼえている。(『陳舜臣さんを語る会通信』No. 114 下枠内表示)

二つ目は戦後、台湾への帰郷中に台北で起こった二・二八事件です。陳さんは台北に近い新莊で銃声を聞きますが、

「その音とともに、同胞の命が一つまた一つと消えて行くことを、そのとき実感できなかったことにたいして、私はいまでも罪悪感をもっている」(『道半ば』p. 245)と述懐しています。

三つ目は、中華人民共和国支持の神戸華僑聯誼会の

会長まで務めた父・陳通氏の背中だったのではないでしょう

か。(『陳舜臣さんを語る会通信』No. 130)



貿易會社「泰安公司」の経営に多忙であつた父・通とそれをたすけた母・蘇嬌
『道半ば』(2003 集英社 p. 11)

【陳舜臣さんの文筆活動の土俵及び祖国】

陳舜臣さんは、小学校入学前から、祖父から、『三字經』ほか漢籍の素読の手ほどきを受けた。成人し、史記、十八史、二十四史ほか歴史資料を精読した。また、三国志演義、水滸伝、西遊記、金瓶梅、紅樓夢など明清の小説を繰り返し読んだ。陳さんの中国ものでは、これらのほか、英文資料も使用され、30回を超える中国・アジア・ヨーロッパへの取材旅行で補強された。

一方、台湾は、17世紀に入り、大陸からの漢人系移民がやっと始まり、康熙帝の時代に清の版図に入るが、1871年の宮古島島民遭難事件の時でさえ、「化外の地」とされ、清の統治は十分に及んでいなかった。そんな状況下、台湾は、大陸と比べ、文字による記録・歴史が極端に少なく短い。

もちろん、植民地時代も戦後も台湾文学はあった。しかし、日本の統治下、及び戦後の二・二八事件、その後の戒厳令下において、文筆活動は命懸けであった。そのような政治状況下、上述のことと併せ、陳舜臣さんは、台湾文学の一翼を担うという道をえらばなかった。

しかし、前ページ、垂水千恵論文にあるように、「台湾は常に陳舜臣の"根"として存在していた」というのは、確かにそうだろう。

陳舜臣さんを語る会通信

NO. 114 Apr. 2024

陳舜臣さんは毛沢東に心酔!? 「詩人教師毛主席」

発行 兵庫県明石市北朝露丘2-8-34
 橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」
 Tel. 0778-911-1671
 編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
 発行日 2024年4月1日
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

1976年9月9日、毛沢東(1893-)が亡くなった。毛沢東死去の情報に接し、陳舜臣さんは「歴史を見る毛主席」を『朝日ジャーナル』(9月24日号)に、「詩人教師毛主席」を『現代』(11月号)に、「巨星墜つ——毛主席のこと」を『小説現代』(11月号)に執筆しました。ここでは「詩人教師毛主席」を取り上げます。失礼とは思いますが、このエッセーに出会い、陳舜臣さんの、文化大革命に対する反応の緩さが分かったような気がしました。(編集委員 橋雄三)

毛沢東の革命政治思想を
つらぬいているのは詩人教師毛主席で、陳舜臣さんは、冒頭、次のように語っています。……

後世の文学史家は、二十世紀の中国の代表的文人として、毛沢東、魯迅の二つの名をあげるだろう。……

革命家であり、思想家であり、戦時家であり、政治家であり、そして教育家であった。……

毛主席には、いふぶん肩書が多い。多くの肩書には、はなはだしく思つたよう、ある人になつて、「私の肩書は一つだけ、教師というのがあるだろう。」という意味のことを語っている。……

毛主席は自分の本質を「教師」と考えたようだ。……

だが、私は毛主席のさまざまな事であるのは詩であるという気がしてならない。すぐれた革命指導者だったのも、人民たちのためのすぐれた教師となれたのも、毛主席のなかに、たましいのほとばしりが、思想や事業につながり、そこで高らかに歌っているのだ。

忘れ難い『斯诺・西行漫記』

陳舜臣さんは、昭和19年の秋、東京へ行った。

このときの東京行きで、私にとつて忘れ難いことが三つあった。第一は本郷の旅館で金石武四郎先生から中国の文字改革の話をうかがったことであり、第二ははじめてB29を見たことである。……

第三に——最も忘れ難いのは、神田の古本屋で、『斯诺・西行漫記』という中国語の本を買ったことである。……

じつはその『西行漫記』こそ、『中国の赤い星』(Red Star over China)の中国語訳だったのである。……

『西行漫記』を読んだとき、私は二十にすぎなかったが、興奮をおさえることができなかった。幾晩も睡れなかったことをおぼえている。……

この人がいて、この党を率いるかぎり、中国は滅びない。……

そう信じていることができたことによつて、どれほど人びとが励まされたことか。百年の屈辱をなめ、亡国の淵に立たされたことのない日本人には、教の星を仰ぐ中国人の心理は理解しがたいであろう。

愛特魯、新訳著
西行漫記
新井 巖
1938

石川禎浩『赤い星は如何にして昇ったか』(臨川書店)より

一九七二年、毛沢東生家訪問
エッセーの記述に戻ります。

私は一九七二年に、毛主席の生家を訪ね、一九七四年には延安を訪ねた。その土地にあって、革命というものがないと、膚で知ったような気がした。

一九七二年といえば、陳さんが、日本赤十字社の証明書による探親訪問という形で初めて中国を訪問した時だ。このとき、毛沢東の生家を訪問していたとは知らなかった。

私(橋)は一九九三年の年末、友人・王さんと、毛沢東の生誕百年に合わせて生家を訪れた。このときの様子を次頁と次々頁で報告します。

詩人教師毛主席

陳舜臣